

即位式絵図にみる宮廷儀礼の世界

九州産業大学地域共創学部教授 末 松 剛

はじめに—即位式絵図とは—

ご紹介に預かりました九州産業大学の末松剛と申します。専門は日本文化史です。今回は日本史学、歴史学の立場から、江戸時代に多数描かれました「即位式絵図」について、文献と照合した結果を披露できればと思います。

即位式とは、代替わりの主な皇位継承儀礼、現在の言い方ですと「剣璽等承継の儀」「即位の礼 正殿の儀」「大嘗祭」として、令和の代替わりでテレビ放映もありましたので、御覧になった方もあるかと思います。即位式というのは、「即位の礼 正殿の儀」の昔の形にあたるもので、その様子を描いた絵図を通じて勉強していこうということです。

即位式は、平安時代は大極殿という広大なスペースで行われていましたが、時代が下るとしだいに規模が縮小しまして、宮廷儀礼のなかで一代一度の最大規模の行事であることには変わりはないのですが、太政官庁、室町時代以降は場所を紫宸殿に移しつつ行われてきました。建物の中央には玉座であります高御座がおかれまして、そこに天皇が登壇され、即位したことを広く披露する儀礼です。紫宸殿の南庭には白砂が敷きつめてあり、内弁という進行責任者を大臣が務め、列立する臣下の側では外弁公卿が6人入場してきます。その6人の代表者が宣命を読み上げます。これが

即位式の基本的な構造です。

庭上には^{どうばん}幢幡が並べ立てられ、その他にも文官・武官が多数参列している行事ですので、即位式は、即位を最も大規模かつ公開性の高い時空で行う儀礼だと理解することができます。令和の代替わりの時には、江戸時代の即位式では庶民が多数拝見していたという研究成果が話題にもなりました。

江戸時代の歴代天皇では、108 代の後水尾天皇から 121 代の孝明天皇まで即位式を行っていますが、そのうち明正・後桜町両天皇は、ご存じの方も多いたと思いますが、女帝です。それぞれ即位式の年月日、その時に摂政・関白が誰であったか、外弁公卿が何人だったかという事実が、この後、絵図の読解に関連しますので、整理しておきます。後光明天皇の時だけ外弁公卿が 7 人参列しています。基本は 6 人です。

このような形で行われてきた宮廷儀礼を見る時の一つ、コツといえますか、心構えにしていることですが、古くからの歴史を伝える行事であっても、常に同じ形を伝承してきたわけではなくて、その都度、いくらかの影響を受けながら、それに臨機応変に対応する形で変わっています。むしろ変わってきているから、儀礼を見ることによって歴史を学ぶことができるわけです。変わらないものはないというニュアンスで慎重に注意深く見つめていかないといけないのが、歴史的に宮廷儀礼を見る時の心構えの一つになります。一方、宮廷文化の粋を集めた時空ですから、意味がないものはないという気持ちで細かく目を凝らして見つめていかないといけない。これも宮廷儀礼研究の大切な一つの見方であり、特

徴ではないかと思えます。

江戸時代の即位式には、平安時代や中世以来、変わらず続く式次第もありますし、変遷したものもあります。近世になって世の中が落ち着いてきたことによって始まるもの、あるいは再興されるものもあります。そのうえで実態とは乖離した描写内容も、江戸時代の即位式絵図には、とくに中後期になると出てくるわけですが、それも一つの歴史です。これらさまざまなことを絵図から読み解いていきたいと思えます。そうすることで、歴史学の観点から絵図を読み解くことにすぎないのですが、今回のテーマである宮廷儀礼を少し身近に、リアルに感じていただければと思えます。

1 即位式絵図にみる歴史文化—天皇の礼服と御後の摂政—

即位式で天皇が着ていらっしゃる赤い服、礼服と書いて有職では「らいふく」と読んでいます。それと天皇のすぐ後ろに控えます「御後」の役割を務める摂政について、注目していきたいと思えます。今回は京都のもので勉強していきたいと思えますので、京都国立博物館に所蔵される立派な六曲一双の屏風、譲位の場面と即位の場面を描いたものをみてみましょう。「靈元天皇即位・後西天皇譲位図屏風」といいます。令和の代替わりのときに展示されましたので、御覧になった方も多いのではないかと思えます。展示された当初は個人蔵でしたが、その後、京都国立博物館所蔵

となりまして、現在はホームページでその場面を確認することができます。いまはインターネットで身近に絵図と触れ合うことができます。

紫宸殿の真ん中に天皇が赤い礼服を着ていらっしゃる。その後ろに摂政が控えている場面です。正面から靈元天皇が描かれていまして、幼い天皇でしたので、子どもっぽい感じで描かれていますが、決まりに則った礼服を着て、後ろに摂政が控えている。博物館の公開する「鑑賞ガイド」を見ますと、「翳によって隠されていた天皇の姿があらわになった、式のクライマックスである」と。確かにその通りです。続けて「天皇の顔まではっきりと描かれている作品は、ほかにありません」と。さすがにそのようなことはなく、他にもあります。珍しい構図ではあるのですけれども。

類例として岡山大学附属図書館所蔵、池田家文庫の中にも即位式絵図が1枚伝わっています。こちらも図書館のホームページで公開されていますので、画像を見ながら話しましょう。高御座の天皇は即位式に特有の「^{こんべん}袞冕十二章」という中国式の赤い礼服を着て玉座にお座りになり、後ろに黒の束帯姿の摂政が祇候しています。

そのほかにも、京都文化博物館がお持ちの「靈元天皇御即位式図」では、高御座に赤い礼服を着た天皇の姿が描かれております。金沢の安江八幡宮にも同じように「御即位之図」として年号が明記された、こちらにも靈元天皇の即位図が伝来しています。高御座の中にお座りの天皇の姿が、帳が八の字に開くことによって披露されたという即位式のクライマックスが、このように描かれてい

ます。なおこの二つの絵図はたいへん似ていますが、ところどころ違うところもありまして、両方の絵図の関係については私の今後の課題です。まだ調べないといけないところがある絵図です。

ところで、袞冕十二章という赤い礼服ですが、定められたのは平安時代前期、弘仁11年(820)の嵯峨天皇の詔によって、元日朝賀という儀礼で着るものとして定められました。嵯峨天皇の時代は漢詩文など、中国的な文化が盛んになった時期ですので、そういう時代の流れの中で即位式にも中国的な装束が採用されたのでしょう。ただし、元日朝賀という行事は平安中期に途絶えてしまいましたので、同じ儀式構造で一代一度行われる即位式特有の装束として、中世、近世と伝わることになります。その場面を絵図で見させていただきました。

岡山大学図書館ホームページの画像解説では、高御座に描かれた天皇が女性のように見えるといい、後桜町天皇の即位と池田家に関わりをもった事実もあることから、後桜町天皇ではなかろうかと推測していますが、これは誤りです。袞冕十二章は男帝用であり、実際に礼服の構成を一つずつ描いた絵図には、「御大袖」として袞冕十二章が描かれており、女帝ですと白の大袖を着ることが注記されています。このような礼服を幕末まで、天皇は即位式の時に一番の晴れ着として着用されていたのです。

そして天皇の斜め後ろ、黒の東帯姿で、霊元天皇に祇候して摂政二条光平が描かれています。ふつう黒の東帯姿といいますと、上級貴族の一番の正装なのですが、即位式では礼服がさらにその上の正装となりますので、黒の東帯姿である摂政は、後見役とい

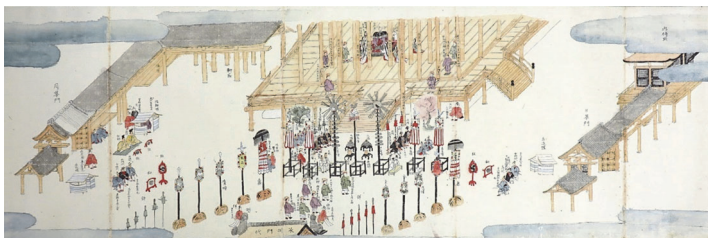
うことで、高御座に登壇された天皇に笏を渡すなど補佐役として参加しております。補佐する摂政がこの場所に座をもつようになったのは、高御座の「壇上丑寅の角」と史料に出てきますが、平安時代後期からです。私が20年以上前に書いた論文「即位式における摂関と母後の高御座登壇」で、平安後期の堀河天皇の即位式において摂政が、高御座に座をもつようになったことを論じています。

このようにして、天皇と摂政とお二人に注目しました。即位式絵図には宮廷儀礼のさまざまな歴史が内包されているということが、今回の私の結論なのですが、まずは平安時代以来のものが江戸時代にも続けられ、絵図に描かれているという宮廷文化の歴史を読み解いたこととなります。

2 即位式絵図にみる歴史文化—外弁公卿の礼服—

次に庭に並ぶ側の外弁公卿の礼服についてみていきます（図1参照）。庭に6人の公卿が緑と紫、緑は正式には「^{きくじん}麴塵」という

図1 「本朝御即位図」（報告者所蔵）



のですが、麴塵と紫の装束を着た6人の公卿が、拝礼するために南の門から入場して並びます。

人名が書かれていますから、享保20年（1735）の桜町天皇即位式の絵図とわかります。外弁公卿6人が南庭に列立して、その代表者一人が宣命使として代表して宣命を読み上げます。これはまた庭の方のクライマックスですから、即位式絵図ではこの場面が描かれている場合がほとんどです。臣下の礼服も日本的というよりは中国的な服装で、幕末まで即位式はこのような光景で行われていました。礼服については、私の信頼する学友でもあります津田大輔さんが、武田佐知子さんとの共著として『礼服』を書かれています。共著ですが、第2～13章までが津田さんお一人で書かれているもので、これが日本礼服史ともいべき内容となっていますので、詳しく勉強されたい方にはお勧めの著作です。

一方、これまで見てきた靈元天皇の即位式絵図では、外弁公卿は全員、紫の礼服を着ていますから、どうもここには違いがある、歴史的な変化があることが窺えます。いつ、どのように変わったのかを整理しないといけない。文献として当時のお公家さんの日記が多数残っていますから、それを丹念に読み解いていくことになります。そうしますと、江戸時代のはじめの3代の即位式では、古い礼服を活用しているので色褪せていたり、揃っていなかったりしたことがあったようです。その後に全員、紫で統一されることになりました。桜町天皇即位式の後は、かつては麴塵と紫、椀（黒）の3色の礼服があったところ、そのうちの麴塵が再興され、外弁公卿6人は2色のどちらかを着るようになったという変遷が

あったようです。

津田さんの本では後光明天皇即位式の時には全員紫になったと書かれていまして、そういう史料があるのです。『古事類苑』にも掲載されるよく知られた記事なのですが、今回、当事者であるお公家さんの日記を見ておみると、最終的に後光明天皇即位式でも古物の礼服で行ったことが、外弁を勤めた人たちの日記に記されています。後光明天皇の時は、ぎりぎりまで再興が検討されたけれども、ということなのかもしれません。

その次の後西天皇の時はどうか。日記を見ますと、6人とも紫で官物、すなわち朝廷から支給されたものを着たことがはっきり書いてありますから、この時に6人とも紫に変わったのだろうと考えられます。

こちらは京都府立京都学・歴彩館でお持ちの「御即位図」です。後西天皇の時に全員紫になったことを示す絵図がないかと探していましたら、偶然出会いました。現在、調査した中で後西天皇の即位式絵図はこの1点だけです。用紙が薄いので下書きか、途中で写すのをやめられたようですが、外弁公卿の名前が全部書いてありますから、後西天皇の即位式絵図とわかりまして、御覧のように全員が紫を着ております。外弁公卿の礼服という点に注目すると、画期となる歴史をリアルに感じることができる絵図が、歴彩館に所蔵されているのです。

そして桜町天皇の時に麴塵が加えられて再興されたことは、津田さんの研究のおっしゃるとおりです。ということで、江戸時代の外弁公卿6人の礼服の色に注目しますと、古いものを使ってい

た時代、紫で統一された時代、さらに麴塵が再興された時代というように、即位式絵図が江戸時代の礼服再興の歴史を示すものであることがわかります。宮廷儀礼の歴史に対する当時の人たちの思いを読み取ることができるわけです。因みに椽を着た公家もいるのですが、その時には参会者の注目を浴びたことが日記に記録されています。そのようなお話はまた別の機会にすることにしましょう。

3 即位式絵図にみる歴史文化—外弁公卿の人数—

最後のテーマです。先ほど紹介しました、現在のところ後西天皇の唯一の即位式絵図として注目しているものですが、実は「外弁七人」と書き込みがあります。数えてみると明らかに6人しか描かれていないにもかかわらず、外弁7人という書き込みは何か、を最後に考えてみたいと思います。

外弁公卿の人数は6人です。ところが別に私が所蔵する絵図にも「外弁七人」と書かれていて（図2参照）、そのほかにも8人や9人描かれた絵図もあるのです。何かしらの意味があって書（描）かれているのですが、外弁公卿が7人であったのは、平安時代から数えても2回しかないのです。

外弁公卿が6人と定まって、大・中納言、参議各2人で構成されるのは、平安後期の後三条天皇即位式以来の歴史であることを、今年書いた論文「平安時代の即位式における外弁公卿について」で解明したのですが、にもかかわらず外弁7人と書かれていると

いうことです。

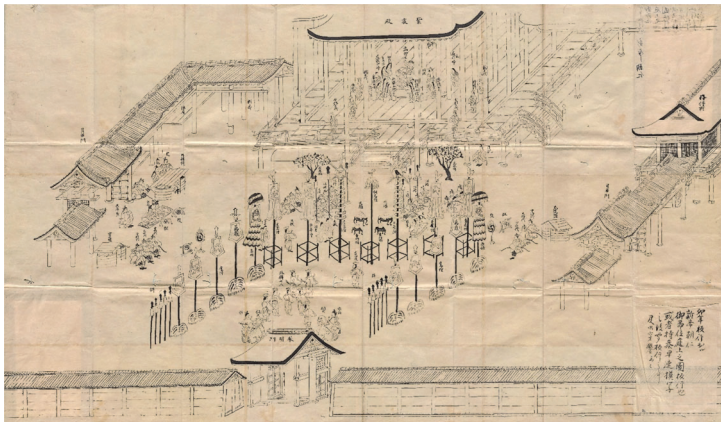
次の絵図は東京の国立公文書館・内閣文庫の史料ですが、こちらにも「外弁七人」と明記してある（図3参照）。しかも宣命使まで数えると、もっと多くなってしまう。

ただし、この絵図には注目すべき貼紙がありまして、東山天皇即位式にあたって即位式絵図が板行された、ということが書かれている。それを借り受けて模写したものであるということですから（図4参照）。東山天皇即位式あたりから「即位式絵図」が大量につくられるようになって、そこに「外弁七人」と書かれていると

図2 「御即位礼之図」（報告者所蔵）



図3 「御即位庭上之図」（国立公文書館所蔵）



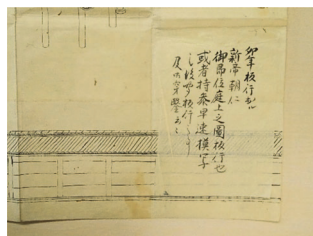
ころに、どうやら誤解が広まっていく理由があるのではなからうか、と現在考えております。

実際に図3の絵図と同じ大きさ、構図の絵図が、今、調査している途中ですが各地にあって、東山天皇の即位式であると明記してある図もいくつかあります。この頃に板行が始まったのでしょうか。

なぜ江戸時代の即位式絵図では外弁7人の様式が広まったのか。実際に江戸前期の後光明朝に外弁7人という形で行われていて、その後の東山天皇の時に板行されることになったことで、事実と異なる即位式絵図が広まることになったのではなからうか。とくに江戸時代中・後期になりますと、より小さな即位式絵図の需要も高まりまして、いろいろなところで板行されています。そういうことがまた、拍車をかけたのではなからうかと考えております。

ということで、外弁公卿の6人が描かれていれば、それは平安時代以来の歴史を書き留めた即位式絵図と考えて結構です。一方、「外弁七人」と書かれていたり、実際、外弁の人数が7人～9人描かれていたりしたら、それは江戸時代の即位式絵図の絵師が、模倣したのか誤謬したのか、そういう結果ですので、歴史史料としては要注意ということになります。ただし間違いも歴史でありますから、それはそれで即位式絵図の板行の普及という事実を読み取ることができるでしょう。

図4 同上貼紙部



おわりに

以上、かけ足でしたが3点、即位式絵図を歴史学の成果によって、少しリアルに感じていただけたのではないかと思います。ご清聴ありがとうございました。

主な参考文献・史料出典

武田佐知子・津田大輔共著『礼服』（大阪大学出版会、2016）

拙稿「即位式における撰閤と母後の高御座登壇」（『平安宮廷の儀礼文化』吉川弘文館、2010。初出1999）

拙稿「平安時代の即位式における外弁公卿について」（坂上康俊編『古代中世の九州と交流』高志書院、2022）

「靈元天皇即位・後西天皇讓位図屏風」（京都国立博物館所蔵）

https://syuweb.kyohaku.go.jp/ibmuseum_public/index.php?app=shiryo&mode=detail&list_id=3546510&data_id=30653

「御即位絵図」（岡山大学附属図書館所蔵）

<https://repo.lib.okayama-u.ac.jp/zoomify/T13-91-1.html>

『御礼服之図』（国立公文書館所蔵）

<https://www.digital.archives.go.jp/img/1257696>

「御即位庭上之図」（国立公文書館所蔵）

<https://www.digital.archives.go.jp/img/4774720>